

始めてみませんか?「書き写し学習」卓上四季ノート

「卓上四季ノート」とは? 北海道新聞の1面に掲載されているコラム「卓上四季」を書き写すノートです。分からない言葉や漢字、天気や気になるニュースも記入できます。

- 卓上四季ノートの効果(個人差があります)
- ☆認知症予防のトレーニングになります
- ☆忘れかけた漢字や言葉を思い出せます
- ☆毎日の社会情勢や出来事を知れます
- ☆文章を読み取る能力が身に付きます



1冊165円(税込み)
※約1ヶ月使用できます。



ご希望の方は、お気軽に道新屈足販売所までお電話ください。



「六十の手習い」

新得町立屈足南小学校長 高 充慶



「六十の手習い」というわけでもないのですが、「興味をもったことはやってみよう」と思うことが、ここ数年多くなりました。このころ家にいる時間が多くなりましたから、なおさらです。

その一つ目が、羊毛フェルトづくりです。着色された羊毛を針で刺しながら形を整え、動物のマスクトをいくつか作りました。昨年クリスマスには、ハムスター用の小さなサンタ帽子を作りました。

二つ目は、ハムスターの飼育です。障がい者就労支援をしている帯広の小さなペットショップからお迎えしたキンクマハムスターと言われるゴールデンハムスターの一種です。

新型コロナウイルスが流行するかなり前からお願いしてたのですが、

コロナ禍で小動物の流通が減り、六か月近くも待つこととなりました。結局、そのペットショップ生まれの子を購入することになりました。

今までペットを飼ったことがない私としては大冒険です。ハムスターの寿命は二年ほど。

できるだけ楽しい二年にしてあげたいと思い、飼育書を読んだり、インターネットで一番人気のペレット(主食)を買ったり、ケージ(飼育箱)の中に敷く、床材を変えてみたり...部屋を散歩させるための囲いや遊び場を作ったり、危ない場所は、透明なボールに入れてそばで様子を見たりと毎晩大騒ぎです。

可愛い姿は、スマホで撮影。先ほどのサンタ帽子を順にちよこんと載せて、クリスマス前の記念撮影もしました。

新しい趣味や体験は、生活に刺激を与え、やりがいを感じさせてくれます。

今まで通りできないという事に囚われるよりも、何か新しいことを始めてみるのが大切かもしれません。

本

無送料

当販売所では様々なジャンルの書籍、雑誌、文庫、新書、週刊誌の定期購読など、ほとんど全ての出版物を確実にお取り寄せします。

今読みたい話題作! 欲しい本をお取り寄せ!

気軽にお問い合わせください。

※当店取り置きとなります。宅配サービスは致しません。

じじの屈足駐在所



佐口賢人 巡査部長

No.5

「やめよう、みんなが困る迷惑駐車」

○違法駐車があると、交通渋滞を引き起こし、また、歩道上駐車は歩行者の通行を妨げます。

○交差点付近の違法駐車は、通行する車両や歩行者の見通しを妨げ、交差点事故の原因。

○消防車や救急車などの緊急車両の活動を妨げ、人命救助に重大な影響を与えます。

○住宅街では、駐車車両の直前や直後から幼児、児童の飛び出し事故や、夜間、駐車車両に気付かず衝突するなど、交通事故の原因に。

○除排雪作業の障害となり、住民に迷惑をかけ、生活にも重大な影響を与えます。



道新一月号のポケットブックの御案内です。



▼ポケットブック11月号「朝昼夕に高タンパク質料理」

タンパク質は、炭水化物、脂質と並ぶ3大栄養素。筋肉をはじめ、血管、内臓、皮膚、髪など体の組織をつくるほか、ホルモンや酵素の材料となつて体の機能を維持したり、体を動かすエネルギー源としても使われます。食生活にうまく取り入れるためのヒントを紹介。一部地域配布済み

二月ポケットブックは休みです。

ねっとわーく屈足

ねっとわーく屈足電子版
ミニコミ紙「ねっとわーく屈足」が、パソコンやスマートフォンで動画も閲覧できます。
ツイッターも屈足の話一杯毎日更新!

じじ-akira1942

連続小説

捨石

赤池武臣

<第2回>

映像は零戦の真珠湾攻撃から始まり、敵の最新鋭機を空中戦で次々と撃ち落とすシーンが続いた。久しぶりに私の血肉は踊った。

忘れかけていた熱い思いが、しなびた血管を押し分けたがりながら体中を駆けめぐった。が、その勇ましいシーンもそう長くは続かなかった。

ある泥炭地に原型のまま不時着した零戦をアメリカ軍が本国に送り、つぶさに研究してグラマンを作ってから、状況は一変し今度は零戦がグラマンの餌食となった。

更に心を痛めている私を逆撫でする様なシーンが展開された。それは沖繩の海に群がる敵艦隊に、火の玉となつて突っ込んでいく日本の特攻隊の姿だった。

大方の特攻機は黒い煙を噴きながら、海上に砕けて散った。主翼をものがれ木の葉のように、きりもみしながら落下していくシーンに胸が痛んだ。どんな時でも笑顔をとやさなかつた真幸の顔が、交錯しては消えた。

おそろくこの様な光景の中、後に続く者達を信じ、いさぎよく散っていったのだろう。

しかしそんな事実も戦後四十年を経て、すっかり風化しようとしている。あたらしい命を捧げ、捨石となつた幾百万の同胞の上にどつかと胡座。(あぐら)をかき、贅沢三味を重ねそれでも飽き足らず、自由資金だとしのぎを削っている。理性も道徳もあつたものではない。

かく申す私も、この誇(ふ)抜けの世にどつぷりと首まで浸かり、未だ生きています。

場面が変わつた。飛行場の全景が映し出される零戦をバックに、別れの水盃を呑み乾す特攻隊員の横顔が一行に並んだ。すでに服装もまらまらである。

私は鼻の奥がジーンと痛んだ。合掌したい気持ちを抑えながら、画面をのぞいた。総員八名だった。何百隻とひしめき合っている敵艦に、たったの八機か。思わず呟いていた。

その時だった。つらぬく様な衝撃が、胸の奥をえぐり、得体の知れない恐怖が全身の毛を逆立てた。

「春樹ッ。春樹ッ。ビデオを、早く、ビデオを早く、戻してくれッ」

つづく